駒の館だより

明治鍼灸大学図書館報

第 11 号

平成4年3月25日　発行

明治鍼灸大学図書館

〒629-03 京都府船井郡日吉町
TEL. 07717－2－1181(代)

形而上学退治－図書館

図書館長　中　村　清

生物の遺伝のからくりの中枢として、競って解明の研究が続けられていたＤＮＡの分子レベルでの構造について、二重らせんというワトソンとクリックのモデルが発表されたのは、1953年４月の「ネーチュア」誌上であった。遺伝子の構造に関するこの提案は、たちまち熱烈な支持を集め学説発表は大成功を収めた。ＤＮＡが含んでいる遺伝情報が、ＲＮＡへ転写され、さらに生体を形成し生命活動を進行させるタンパク質に翻訳されるという基本的過程と、それがさらに複製によって次代に正確に伝達されるというモデル理論は、60年代に彼らによって「セントラル・ドグマ」として提唱された。

このドグマ即ち中心的仮説は、基本的には現代でも正しいとされているが、そうしたいわば古典的分子生物学的生体像は確かにいま次第に相対化されてきてはいる。つまり「ドグマ」と言われたが、絶対的なものではない。移動能力を有して情報を変化させるＤＮＡ上を「動く遺伝子」の単位の発見や、立体構造の多様性と変形の現象の観察は、遺伝子のからくりが柔軟なものであることを示している。このように遺伝理論が時と共に推移するのは、「ドグマ」が崩れていくといういわば「形而上学退治」の進行を示すものであると共に、生物学そのものがいまや形而上学的思索の段階に到達していること、もっと適切に言えばそうした側面を有するものであることをも示している。

「形而上学」の意義をドクマといった固定観念の体系とする受け取りかたは、カントを境にして変化し、以降もっとダイナミックな要素を取り込んで考えられることが多い。その意味では、生命現象の研究は、現象をすべて「もの」として把握し切れない以上、それが仮説とか理論とか称される形であっても形而上学的な性格を持つと言える。

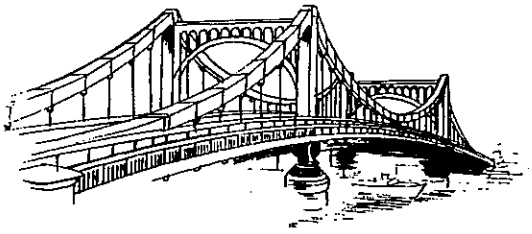
一方、抽象的な形而上学的現象を、「もの」に置き換えて表現するのに成功すれば、それは確かに「科学」の進歩につながることになる。こうした科学理論の発展の仕方は、前世紀に行われたヘーゲルらの伝統的形而上学批判としての弁証法に通ずるものであり、科学的研究はむしろ弁証法的構造を有すると言って良い。そして退治すべき形而上学ドグマがないかどうか検討するのが、常に科学の課題である。

ただしその場合思想史的には、「もの」そのものあるいは「実在」についても、それを固定的でなく発展の契機を内に秘めた存在として考える現象学やベルグソンらの形而上学に「現代の」形而上学を代表させるべきであろう。

今の時代の図書館に、新しいストラテジーが求められるとするなら、これもまた形而上学退治の様相を帯びる。基本的に言えば、図書館が知的資源を保有し、それを利用者にインフォームする機能を果たす場所であることは、今も変わりない。メディアが書物だけでなく、ＡＶやフィルム、テープ、ディスクになり、管理に電子機器が導入されて場所としてのイメージや使い勝手の大幅な変化が起こっているとしても、本質的には同様である。

ただしその知的資源、情報源についての考

え方には、それを「永遠の真理」の探求と言った固定的な捕らえ方をするのか、それともそれ自体生成発展する何事かの現在的把握であると心得るのかによって違いは出てくる。情報を古典的とはいえ固定したソースのみに限定することや、新しい知識にあえて背を向けることは不毛であり退治すべきドグマに類する事であるが、その一方おびただしい量の新情報の中から本当に重要な、役に立つ、真実を伝えている、しかも生成発展する実在をトレンディに知らせてくれる情報を選び出して収集し、それを能率的に利用できる形にするには、その根底に大いに知的形而上学的努力の基盤が要求されるのである。



「図書館と古本」

病理学　加　来　博

近頃の新刊書の数の多いのには驚かされる。書店で目的の書籍を見つけるのに苦労する。しかも、あまり期日も経っていないのに「もう全部、返本して、店にはありません」ということもしばしばだ。

もう一つ、輸入書（主にアメリカ）の価格が円高ドル安にもかかわらず、10－20年前と変わらないのも不思議だ。輸入書店に聞いても要領を得ない。　東京の「夢の島」のテレビ画面で大きな新品のロール紙が何巻も捨ててある。京都市内の病院でも臨床検査の結果を全てコンピューターに入力し、即日に結果を外来に届けるため数億円をかけたと聞いた。病理もこれに取り込まれ、自分用のファイルにタイプするが、印刷はまとめて一度に行うので、機械の設定を間違うと全部プリントのやりなおしとなった。

昔は皆、「本」は大切にした。少年のころ活字に飢えていた。字の書いてあるものは、おもしろくないものでも読んだ。女学校の西洋史や修身の本まで読んだ。学生時代、解剖のラウベルかシュパルテホルツを買う、と父に言ったら「そんなものは図書館でよめ、講義をノートにとって本のかわりにせよ」と言われた。戦災を免れた４巻のうち２冊（1920年版）が残っていて手許にある。実習の時にはそれを使った。はさんであるメモが懐かしい。

結局、小遣いをためて買った本はウエストとトッドの生化学とビュッヒナーの病理学総論と各論（各6000円程）で、病理の勉強のはじまりであり、当時、助手になられてまもなくの藤田哲也現京都府立医大学長とのおつきあいの始まりであった。後年、ピュッヒナー教授（フライブルク大、同研究所長）の肝臓癌発生についての講演を大阪で感慨深くきいた。

当時の京府医大病理学教授の田中秋三先生（当時、図書館長）は私にとって、実に有り難い、恩師で、御長命であったが、ついに一昨年亡くなられた。少なくとも年に２回は訪問していた。つい亡くなる数ケ月前にもお元気にしておられた。先生が講義の種本にしておられた、ディートリヒの病理総論を丸太町の古本屋をさがしまわったが見つからなかった。病理第一講座の荒木教授は、当時出たばかりのビュッヒナーで講義されていたのには感服した。

田中先生は一通のルドルフ・ウイルヒョウ直筆の葉書をもって居られた、昔、府立医大の病理学教授（田中先生の恩師）で図書館長でもあった梅原先生がドイツに留学されていた時、（当時、アショフは既になく、オットーの許だった）手にいれられたものと聞いた。私も見せてもらっ

たがドイツ文字が小さく、ぎっしりと書かれたもので、とても読めなかった。

田中先生が、後年ドイツに行かれた時、この葉書の内容が初めて分かった。それはウイルヒョウがドイツ帝国議会（当時）の下院議長宛のもので、学問とは全く関係のないものであったが、彼が政治家としても有力者だったことは，よく分かった。

20年前、ドイツに行ったとき、ハイデルベルグ大学の近くで、天気の良い路傍に沢山の古本が医学関係のものを含めて、並べられる。当方が医師と知ると急に、大変親しげになる。そして日本の近代医学はわれわれが手ほどいたものだという、態度が感じられる。メーリングの有名な内科書、上下２巻も並んでいた。こうゆうものに興味を持っていると、ひょんなことから古い顕微鏡が手にいった。大学の備品を新しいのに取り替えるとき、下取りしたものを、業者が買ってくれという。私にとっては学生実習の度に準備していたもので、格別、懐かしいものだ。蓋を開けてみると、1899年のラベルが入っている。購入時期か製造年かは不明だが、とにかくゴルジがゴルジ体を見つけた翌年（1898年）、ニッスルがニッスル小体を発見した年（1894年）とも近い。ツアイス社のもので真鋳のボディといい、レンズといいりっぱなもので、今は小生の大切なものの一つである。

学生時代に図書館の「虫」だった二人の友を思い出す。一人は東京女子医大心臓外科教授で惜しくも早世された、今野草二先生と前ニューヨーク市立大内科学教授、現ラトガース医大教授の川西秀徳先生である。

今野先輩には、いろいろ勉強のアドバイスも戴いたが、コーラスの仲間でもあった。モーツアルトの戴冠ミサを慣れぬラテン語で歌い、大阪の朝日会館に出たり、ＮＨＫのラジオに出たりもした。夏の合宿では手術用のキャップで参加していた。川西君の新品だったラウベルは実習の終わる頃にはボロボロになっていた。自分の試験の成績が良すぎると教授に「文句？」を言いに行ったりして、少々変わった所もあった。最近、日本にも時々、講演旅行に来てくれるが、勉強家には珍しく、非常に親切で友情に厚い人だ。この年末のクリスマスカードにも私に明治鍼灸大で頑張るようにと、したためてあった。

現在、大阪大学解剖学教授の藤田尚男先生とは、先生が助手で結婚一年目頃、私の解剖実習時代からお付き合い願っている、尊敬する先輩である。実習中にされた質問は昨日のことのように覚えている。私が病理学教室の助手になってから、時々、藤田哲也先輩と解剖の講義の聴講にいった。学生が次々に質問されて、答えられないと、その質問は最上段にいるわれわれの所にもきた。「四丘体上丘とはなにか」「視覚の伝導路は」と言う具合だ。御宅にお邪魔すると、話がはずんで、気がつくと明け方となっていることもあり、奥様がよく我慢されたことと思う。広島大学から大阪に来られてから最近、再び交流が復活し、年に一、二回、夫婦同伴で相互訪問して、話がはずむ。先生は現在、東大の他、ヴュルツブルグ、ウィーン、パドバと客員教授でもある。絵画について解剖学の歴史はくわしく、「人体解剖のルネッサンス」の著書もあり、御自分でも大作の油絵を画いておられる。昨年の６月にも電話で「今晩、８時からＮＨＫの日曜美術館に出るから見てください」とのこと。すぐ見せて貰ったが、レンブランドの解剖の油絵解説で先生ではなくてはできない解剖学者らしい解説でおもしろかった。

先生とはずむ話の一つに「古本さがし」がある。私が主として、明治時代の本をさがしていて、それは絵本だったり、小学校の教科書（理科、修身、歴史、音楽等）だったり、谷崎や川端の初版本だったりする。時に、福沢諭吉の「西洋事情」が手に入ったりする。少し前には明治14年発行の小学唱歌の教科書があった。東京音楽学校の編纂だが、君が代のメロディーが今のものと全く違う。歌詞は確かに同じだが、何と「二番」がついている。

藤田先生も興がのって来ると、明治の古い「桃太郎」を歌ってみてくださる。少々、今のものと違っている。

先生から、松本に青翰堂という古本屋があるのを聞いた。早速、寄ってみた。ミニ松本城を型どっている構えで、２－３珍しいものを見つけた。昔、縦書きの医学書に「脚気菌」なるものが発表され、北里　柴三郎博士がドイツに留学中にこの学説を批判し、帰国時には出迎えの研究者一人もなく、これが後の東大伝研騒動の発端となった。博士はのちに自分の研究所、

北里研究所（現北里大学）をつくることになる。

京都府立医大の図書館には新しい本が少なくて（当時、医大は大変貧乏だった）不自由した。各図書館の間の交流、文献のコピーのやりとりが活発となって行った。逆に古い文献は新設の大学に比較すると、ましな方で、1888年のビツオッチェローや1870年のエップシュタインの文献は直接、読むことができた。古い、シュテールの解剖学のハンドブックの消化管の部分は1925年のチンマーマンの業績によるところが大きい。この文献は東大の図書館に依頼した。

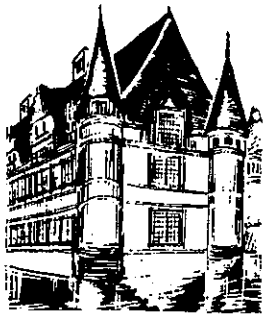
ビツオッチェローのいたパビイア大学はゴルジがより年長であったにもかかわらず、その下で教えを受けたとのことである。

有名な世界初の人工的発癌実験である山極、市原両博士のタール癌の論文も筒井博士の追試論文とともに東大に依頼した。

先人の博識と精密な研究には、本当に頭の下がる思いがする。

これからの図書館は、古いものは古い施設にまかせて、出来るだけ新しい書物や文献をととのえることが望ましい。

自分は趣味としての古本さがしはほそぼそと続けることになるだろ。



文明の進歩とこころ

東洋医学教室　篠　原　昭　二

人類の歴史は約400万年前に遡るとされている。そこで、それを100mに例えてその時間軸の上に、大きな出来事を並べてみると、ゴール手前12.5mで火を使い始めたことになる。25cm手前で古代エジプト文明が栄え、5cm手前でイエスキリストが誕生し、5mm手前が産業革命、そして高度情報化社会は僅か0.3mm手前ということになる*)。人類の誕生から火を使い始めるまでの時間に比して、それ以後の人類の歴史は加速度的に発展してきている。しかし、不幸にも、文明の発展の成果として必ずしも人類が幸福になったとは言えない現状が随所に見られる。富める国と貧困に喘ぐ国の格差は大きく、益々その差を開きつつある。しかし、富める国といえども必ずしも笑顔が溢れて幸福に満ちているわけではなく、貧しい国が必ずしも悲しみが多く、不幸に打ちひしがれているとはいえない。

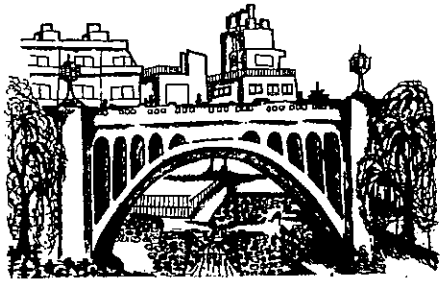
一方、「十年一昔」といわれていたものが、今や数年たらずで技術革新が行われている。そして、数年前に苦労して買った新しい機械や車、家庭用生活機器等は少しの間に安価で高度な機能を満載して、店先に所狭しと展示・販売さるようになった。何もないとき、たとえそれが最高のものでなくても、また多少の不便があったとしても、新しいものを手にしたときの喜びは非常に大きかった。しかし、苦労して買ったときのあの大きな感動は何時の間にか薄れてしまい、次に新しく便利をものが出現したとき、自分が今まで持っていたものがつまらなく思えることさえある。機械や物がつまらなくなったわけでは決してなく、新しくて機能が優れているもの、より便利になったものがすばらしいという、価値規準によって判断されることであろう。

より便利なもの、より快適なものを追及することが幸福への近道だとしたら、あちこちに幸福に満たされた家庭が溢れるに違いない。しかし、世論調査を待つまでもなく、幸福感を自覚している人は少ない。幸福は決してものだけでは満たされないものと言えよう。

ところで、身の回りにはコンピューターがあちこちに設置されており、文書作成や複雑な計算、統計処理などに頻用されている。学生の頃、加減乗除しか出来ない計算機しか持っていなかったが、それでもこんな便利なものはないと思っていた。そして、膨大な量のデータについて先生の指示のもとでt検定を行ったことがあるが、確か1週間くらい朝から夜遅くまで計算に明け暮れ指先に豆が出来て、とうとう指ではキーが押せないくらいまでしてやっとの思いで計算結果を報告したことがあった。全く同じ程度の作業をパソコンを使ってやってみたところ、僅か半日でグラフまで出来てしまった。

当然、原稿の作成なども400字の原稿用紙約15枚を、十数回清書し直す始末であった。ワープロを使えばいとも簡単に、一見素晴らしい文書を数分で修正することも可能である。科学技術の非常な進歩（？）は、時間を短縮することに大きく貢献してきた。しかし、統計計算一つとっても、原理や実際の計算方法を理解してデータを出すのと、単に機械的に計算結果を出しても、両者の間には違いは見当たらない。また、十数回の清書を繰り返して完成した文書と、ワープロで作成した文書と、やはり区別できるものではない。しかし、結果が同じなら、どちらでやっても本当に同じ事なのだろうか。最近の若い世代（筆者も若いと思っているのだが……）にとってものは身近にあって当たり前のこととして、育ってきいてる。事の良否を云々する積もりはないが、何か大事なものが欠けているような気がするこのごろである。

＊：京大霊長類研究所・江原昭善先生の日本ストレス学会特別講演での講演内容（1991年10月，東京）より



感　覚　の　旅

東洋医学教室　廖　　登　　稔

〝熱い〟、〝痛い〟、〝苦い〟、〝臭い〟などの感覚表現は日常の生活中に親しみのある用語であることを知られている。我々が自分の周囲の環境や自分の体内で起こっている事柄を体験する場合、それらを直接あるいは特殊化した感覚器官を通して知覚する。ですから、ある感覚器官によって仲介されるある一群の互いによく似た感覚印象を感覚と定義されている。もちろん、この中には視覚・触覚・聴覚・味覚・嗅覚などの原始的な感覚も含めている。これらの感覚の中に我々にとって重要なのは体性感覚であることは承知されることである。その理由は鍼刺激は体性感覚刺激の中の一つであること。

鍼刺激によって引き起こした〝腫れぼったい〟、〝重苦しい〟、〝圧迫されるような感じ〟は古くから中国の古典医学に記載されている。これらの感覚の出現は鍼の治療効果との間には密接な関係があると報告された。しかし、この感覚は痛み感覚とちょっと違った感覚であり、その発生機序及び中枢への神経伝達経路はある程度研究されているが詳しいことはいまだ分かっていないままである。この度私もこの奥深い感覚の淵に一度訪ねてみたいと思いながらミクロ・スペーシャドルに乗って明治鍼灸大学から出発した。

数え切れない惑星を通過し、目的地のS点に着陸した。しかし、広い大地の中に自分自身がどこにいるのか分からなかった。目の前に巨大な樹林が林立し、無数の谷の間を静かな水が流れて行く。まさに月の表面の様な静けさが私を

包んだ。現実的な社会の騒雑から離れて休養できるのは嬉しく思います。この時に中国の唐時代の詩人王維の詩を思い出し、〝空山不見人、但聞人語響・返景入深林・復見青苔上〟の心境は多分この様な環境と似ているでしょうと思うときに、突然、雷のような声が聞こえて来る、ついに大地が急激に動き出した。この地震はマグニチュードの記録を更新の中に急に止んだ。危ないと思うときに空の色が急変し、ジェット機が雲の中に突入した様な感じ、瞬間に暗くなって大地も再び揺れ始めた。今回の揺れに伴って鉄砲水が発生し、私は流木をしっかりと抱いているために無事だったが、水を沢山飲んだため頭がふらふらと酔ってきた。洪水が退くのは速かったと不幸中の幸いを祝うときに三度目の地震が起こった。今度は釈迦仏の五指山が崩れて来るような感じで、私がのちに孫悟空の金箍棒に吸い込まれて一緒に地下に潜り込んだ。目が覚めると自分が金箍棒の側におり、周囲に赤色の巨大な壁ばかり、自分が地底にいるような感じ、近くにも急流が流れている。金箍棒に破れた壁のところから異様な物質が流れ出し、機械・化学・温度・圧などの受容器兵達が集まって来て討議をしていた。このところは意外に秩序のある社会だった。あー良かったと思ったところに急に金箍棒が動かされた。危険のため、受容器兵達が一生懸命逃げて途中で怪我をした。まもなく脱分極兵が助けに来て、何も聞くことなく私を犯人として中央司令部に送った。輸送車は現代的な乗りものではなかったがスピードは速かった。まもなく輸送車が第一ゲートに達し、ＳＧ将校に報告してからゲートを開けてくれた。そのところで再び乗り換えられ、今度はＳＴ高速道路を通って北上した。私も長旅で疲れてしまった……、しらずしらずの内に目的の中央司令部に到着した。大変と思いながら私は不法侵入の罪に問われて死刑を宣告され、即時処刑と命じられた。弁解の余地もなく、処刑台の上に載せられ、発砲の音が聞こえてくると同時に、痛いと感じた……と私が目をさましたら自分は超高速新幹線の中でした。体中を調べて、一つの傷もなかったことを確認して、やっと安心した。誰が助けてくれたかを考えているうちに終着駅に到着した。新幹線から降りて周囲を観察した。そこは自分が脱分極兵に捕まえられた場所だとは、まさか思わなかった。なぜここにいるのか、いま考える時ではない、一生懸命に金箍棒のところに走った。着いたときには金箍棒が再び激しく動きだし……私はそれをしっかり掴んで……揺れながら地底から抜き出された。空が青く、雲が白く、私は帰えれると考えた。まもなく、ミクロ・スペーシャドルが見つかり、それに乗って明治鍼灸大学に帰ってきた。

残念ながら私は感覚の中央司令部までの旅しかできなかった。その他の帰り道も確認したかったが駄目であった。この旅から得られた経験は患者に対しての鍼治療は心細心ものであり、また患者が受け取った主観的な感覚を無視できないことである。従って、常に患者の感覚を観察しながら初めて良い治療ができると考える。

「趣　　味」

保健体育教室　真　田　民　樹

今回「駒の館だより」の原稿依頼をいただき大変苦慮しています。私自身現在まで教科書以外の本をどれだけ読んできたのか自信がないからです。

学生時代は、スポーツ活動や遊びが中心の生活であり、落ち着いて本を読むことはあまりなかったと思う。しかし高校時代に一種の流行（はやり）があり、文庫本を手に持ったりカバンの中に必ず一冊入れておくのがスタイルであった。なぜかというと、喫茶店で女の子と会うときにテーブルの上に本を置いて話しをするといった程度のものであった。本の中身といえば難しい物ではなくおもしろい青春ものばかりを読んでいた。

そんな中で、本に関する気になることがあった。それは「趣味」を書くことの多かったことである。入学試験のときの調査書・履歴書など、また、週刊誌などの読書欄に、よく「ペンフレンドを求む」などというのがある。住所・氏名・年齢・職業などとともに、きまって「趣味」が書き添えてある。野球・テニス・ゴルフ・ギター・音楽鑑賞・切手・自動車等その内容もさまざまだが、一番多いのが、「読書」である。これは、昔も今も変わらない。娯楽の手段がさまざまに増加した今日、趣味の分野も内容もまた複雑に多元化したがそれでいて、「あなたの趣味は……」という問いに「読書」と答える人が増加はしないまでも少しも減っていないということ、これはおもしろいことである。

趣味というからには、普通の関心以上の好奇心と愛着とをそのものに対して抱いているのがおおかたの趣味のありかただが、しかしいったい、それほど読書に対して人一倍の興味と愛情を持っている人間がいるだろうか、どうもそうではないようにわたしには思える。

第一に、趣味のうちでも「読書」は、その性格・程度がひどくあいまいだということ、少なくとも「野球」とか「釣り」「スキー」といったものほどにその趣味性が明確でないということである。早い話が、週刊誌を毎週必ず一冊ずつ買って読んでいること、これもまた考えようによっては「趣味は読書」のうちにはいるのである。文庫本を月に一冊程度は読むということも「趣味」なのである。釣りやスポーツのように熱中こそないがそれが嫌いだというのではない。この程度の本とのかかわりかたであっても「趣味は読書」といえるところに、読書の楽しみの幅の広さがあるのだと思う。

ほかに熱中すべきものを持たない自分自身の貧困さをカバーするために「読書」と答える人はいる。趣味の欄に「読書」と書き込んでいる人たちの多くは、たいてい「無趣味」の代名詞がわりに使っているのではなかろうか。（私のコンプレックスかもしれない）、「趣味は読書」というのはそれくらい無難で安全なものとして通用していると思う。それは、多くの人たちが「読書はいいものだ」と認めていればこそで、要はそれに恥じないだけの楽しみ・喜びを読書に発見してゆけばいいのである。それは、その気になれば、いつでも・だれでも発見できるのである。

ところで、私自身の「趣味」といえば、職業柄スポーツ活動が中心で、テニス・野球・ゴルフをやっている。これは、やっていて楽しいこと・長く続けること・人と人との出会いやつながりを大切に、をモットーにしている。

しかし、最近の本の宣伝・広告は目から耳から、人の噂・評判などがいやおうなしに我々を取り囲んでいるような気がする。

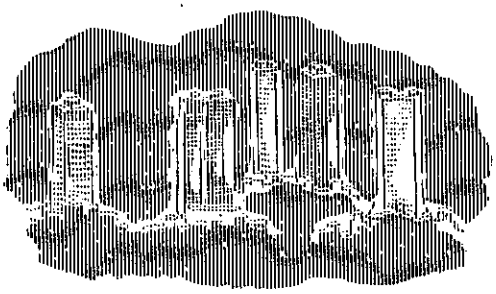
もちろん、そおいう他人の声で買い込んだ本が、読んでみるととてもよいものであった、ということはないでもない。それがきっかけとなって、あとは興味のまま買い求め読み進んでゆくこともある。しかし、それはむしろ少ないと思う。

今日では、週刊誌などが、よく特集のかたちで、「現代人の読むべき〇〇冊の本」とか「ビジネスの必読書」といったものを載せるが、それはどこまでも参考程度にとどめたほうがよい

と思う。あまり「必読」とか「読むべき」などということにとらわれると「ミイラとりが、ミイラになる」ということは、未熟な我々においてはよく起こることである。

必読・必見などという宣伝文句に惑わされずに、気楽に楽しんだほうがよい。

現在、本の種類も数も洪水のようにたくさんあるから、考えようによっては、それだけ楽しみの機会も多いといえる。本の洪水現象がいいか悪いかは別として、この機会をほっておく法はない。どんな接しかたどんな読みかたでもよい、とにかくタイプはさまざまにあるが、大いに楽しみ有効に生かすことが第一ではないかと思う。



西洋図書館小史（その十一）

附属図書館　八　木　克　彦

（承　前）

次に、国立プロイセン文化財団図書館（Staatsbibliothek Preussischer Kulturbesitz）ですが、この図書館の歴史は1661年から1939年までは以前に述べたドイツ国立図書館の歴史に重なります。即ち、その起源は1661年フレデリック・ウィリアム大選挙侯によって創設された図書館にあり、1701年王立図書館となって組織化・拡大されて1786年には約15万冊の蔵書を保有、1914年迄にはウンター・デン・リンデンの広大なビルに移り、1919年にプロイセイ国立図書館と再命名されました。

1939年にはこの図書館は３百万冊の図書と７万巻以上の写本を有して、当時ヨーロッパ第三の大図書館となっております。

第二次大戦中コレクションはドイツ国内の安全な地域に疎開されたのですが、そのうち約170万冊は西独地域でした。

戦後西独地区の図書と写本はマールブルクとテュービンゲンに集められ、マールブルクのコレクションは当初ヘッセン図書館として、1949年以降は西ドイツ図書館として保管・利用に供されました。

1962年プロイセン国立図書館はプロイセン文化財財団に編入され、疎開されていた資料は西ベルリンに戻りはじめました。テュービンゲンに集められていた資料は一時期テュービンゲン大学に信託保管されていましたが、貴重な写本類とインキュナブラは1967年から８年にかけて返還されました。

この財団図書館の目的とするところは、旧プロイセン国立図書館から受け継いだ貴重な財産の保護を主とする特殊部門の充実と、国内外の学術雑誌の入手を計って包括的な情報センターとして機能することでした。

例えば、約2,000館の図書館に所蔵されている雑誌の総合目録の編纂、連邦内約500の図書館が持っている新聞・画報類のカード目録作成等です。

その後、新しい建物がハンス・シャロウンによって設計され、ベルリンのティアガルテンに建造されました。この極めて大規模な図書館建築はヨーロッパ最大のものの一つで、800万冊の収容能力をもっております。

1978年新館開館当時、約264万冊の図書と８万３千巻の写本類、３万２千種の雑誌を所蔵し、フランクフルトのドイツ国立図書館並びにミュンヘンのバイエルン国立図書館とともに西ドイツの国立図書館としての機能を果たすこととなりました。

この財団図書館の所蔵資料のうち、いわゆるTreasureとしては次のものがあげられます。

写本部――西方写本約9,000、グーテンベルグ聖書を含むインキュナブラ3,000、30万の自筆原稿（特に科学技術関係の歴史：ケプラー、ガリレイ、アインシュタイン等）。

また、ヘルダー、フィヒテ、ヘーゲル、グリム兄弟、シュペンハウアー、ハウプトマン等からの遺贈書も有ります。

音楽部――約18,000の稿本、（バッハ、ハイバン、モーツアルト、ベートーヴェンの自筆原稿を含む）、メンデルスゾーン一家の特別コレクションなど。

地図部――地図35万枚、地図帳３万冊

東ヨーロッパ部――蔵書27万５千冊

オリエンタル部――写本５万６千巻、ネパール、インド、エチオピアの写本のマイクロフィルム27,500巻

東アジア部――蔵書11万冊等々です。

貴重な遺産を継承している図書館の一つとしては、シュトウット・ガルトのヴュルッテンベルク州立図書館（Württembergische Landesbibliothek mit Bibliothek für Zeitgeschichte）をあげることが出来ます。

その起源は1765年にヴュルッテンベルクのカール・オイゲン公が創設した図書館で、当初蔵書はUriot, Fromann, Nicolai等の古い個人文庫の書籍によって構成されていましたが、その後オイゲン公及びその使者が巨額の資金を費やして図書の蒐集に努めたこと、特に1803～６年のSäkularisation（教会財産の国有化）によって、多くの修道院や宗教施設から写本や書物のコレクションがシュトウットガルトに齎されたことによって急速に充実しました。

1806年以降、この図書館は公共的使命を帯びることとなり、フリードリッヒ・ステアリンやウィルヘルム・ハイドと言った有能な館員達によって所蔵を増やし、1883年には新しい建物に移転して業務を続けていました。しかし、残念なことにこの建物は大戦中1944年に焼失して了い、58万冊の図書が灰燼に帰しました。

1970年になって新しいビルが再建され130万冊の図書と、１万１千の写本、６千５百余のインキュナブラ、１万９千の新聞を備えました。

所蔵品のうち特に貴重なものとして以下のものがあります。

中世の写本2,500、近世の写本8,500

５世紀のラテン語訳聖書

多くの装飾を施したカロリンガ朝時代のシュトウットガルト詩篇（820～830）

聖Gereon（コローニュ　1050）の福音書

Hirsauer殉教者列伝（1120～1140）

チューリンゲンのヘルマン侯のために書かれた詩篇

ワインガルトナー写本――ハイデルベルクのドイツ歌の本マネッセ・コーデックスについで最も有名なもの

特に貴重なものとされるUlmerインキュナブラ

フロマーニュ図書館から齎された300冊のインキュナブラ（1785）

ナンシーのルール僧院のコレクション（1786）

1501～1750年の間印刷物約１万点等です。

この図書館以外にも貴重な遺産を所蔵している図書館はドイツ国内に数多くあります。

例えばフランクフルトの都市・大学図書館（Stadt und Universitäts bibliothek）にはグーテンベルク（Gutenberg）が1455年マインツで印刷した42行聖書、フストとシェッファーによって1462年に出版された48行聖書などです。

「四十二行聖書」は一頁四十二行で印刷されていることからこのように呼ばれているのですが、グーテンベルクが世界で初めて活版印刷術を発明し、その技術を使って初めて製作したものという歴史的な意義をもつと同時に技術的にも極めて優れた印刷物です。

「四十二行聖書」は２巻からなっていますが、完本に現在世界で20部しか残っていません。

（この項つづく）

近着東洋医学系図書一覧（和書）　（平成３年１月～12月収蔵分）

レーザー鍼と光灸療法　深沢要　谷口書店　平２
基礎中医学
王新華編著・川合重孝訳　谷口書店　平２
和刻　漢籍医書集成　20～30
小曽戸洋他編　エンタプライズ　平２
鍼灸極秘抄　木村太仲　谷口書店　平２
臨床医のための針灸漢方治療指針
柱本俊二他　クリエイティブ　昭63
続 日本漢方腹診叢書１～６
松本一男監　オリエント出版　昭62
黄帝内経研究叢書１～６
石田秀実編　オリエント出版　昭62
体系中国老人医学　李聡甫主編
池上正治訳　エンタプライズ　平３
皮膚科の漢方治療－弁証と臨床－
中島　一　現代出版プランニング　昭62
医心方　国宝半井家本医心方１～６
オリエント出版　平３
医心方　仁和寺本影写本
多紀家旧蔵本　オリエント出版　平３
医心方　日本医学叢書活写本
オリエント出版　平３
漢方基礎理論　長瀬千秋　谷口書店　平２
逐条解説
あ・マ・指・はり師・灸師等に関する法律、柔整師法
厚生省健康政策局 編著　ぎょうせい　平２
鍼灸医学における実践から理論へ
藤本蓮風　谷口書店　平２
メビウス環上配経法　宮脇浩志 他　谷口書店　平２
日本漢方名医処方解説　１～19
松本一男監　オリエント出版　平１
中國古代科學史論
山田慶兒編　京都大学人文科學研究所　平１
ステロイド剤と漢方方剤の併用療法
有地滋 編著　東洋学術出版　昭61
最新鍼灸治療学　上・下
木下晴都　医道の日本社　平1,3
写真でみる経絡正体法　山根兵太郎　谷口書店　平３
黄帝内経古注選集　１～６
小曽戸洋他解説　オリエント出版　昭63
漢方原典攷注集　１～８
北里研究所編集協力　オリエント出版　昭61
癒しのまなざし　中川米造対談集
中川米造　福村出版　平１
医心方の伝来　杉立義一　思文閣　平３
外科医の漢方医療
矢山利彦 他　医学出版センター　平２
図説深谷灸法　入江靖二 編著　自然社　昭60
中医辨証施治必携　王元武 他　医歯薬出版　平３
疾患別中医治療の実際
新井基夫 他　医歯薬出版　平３
臓腑経絡学ノート　北辰会出版部編　谷口書店　平３
漢方用語大辞典　創医会学術部編　燎原　昭63
講談社　東洋医学大辞典
大塚恭男 他編　講談社　平１
針灸学　基礎篇
天津中医学院他編　東洋学術出版　平３
写真でみる脳血管障害の針灸治療
石学敏　東洋学術出版　平３
黄帝内経概論　龍伯堅　東洋学術出版　平１
症例から学ぶ中医弁証論治
焦樹徳　東洋学術出版　平３
明趙開美本傷寒論　北里研究所他編　燎原　昭63
清陳世傑本金匱玉函経　北里研究所他編　燎原　昭63
元鄧珍本金匱要略　北里研究所他編　燎原　昭63
奇経八脈攷　全釈　李時珍編著　燎原　平３
針灸経穴名の解説　高式国　燎原　昭63
東洋医学を学ぶ人のために
山下九三夫他編　医学書院　平３
臨床中医学概論　張瓏英　自然社　昭63
写真でみる針灸補瀉手技
鄭魅山　東洋学術出版　平３
中医臨床のための舌診と脈診
神戸中医学研究会編著　医歯薬出版　平３
気の挑戦－中国気功科学はここまできている－
仲里誠毅　緑書房　平２
冷えと食と東洋医学　梶田博他　神戸新聞社　平２
特効針灸治療法　福島聰　壮神社　平２
症状による中医診断と治療　上.下　趙金鐸主編
神戸中医学研究会編訳　燎原書店　昭62
灸頭鍼入門　田中博　オリエント出版　平３
産婦人科漢方研究のあゆみ　５～７
竹内正七他監　診断と治療社　昭63～平２
鍼灸医学典籍大系　１～23
日本古医学資料センター監
出版科学総合研究所　昭54
中医栄養学　山崎郁子　第一出版　平３
更年期障害の漢方治療
村田高明　現代出版プランニング　平３
小児アレルギー疾患と虚弱児の漢方治療
広田曄子　現代出版プランニング　平３
漢方処方と腹診　木下繁太郎　エンタプライズ　平３
現代医療における漢方製剤
有地滋編著　東洋学術出版　昭61
現代医療と漢方薬（全面改訂）
谿忠人　医薬ジャーナル社　平３
現代医学と漢方の併用療法
松多邦男他編　広川書店　平３
"気オロジー"とワンショット療法
伊東聖鎬　エンタプライズ　平２
手技療法の家庭医学
安達和俊　エンタプライズ　平３

あとがき

ドイツの統合、ソ連邦の解体――どうなることかと思っていたアルベールビルの冬季五輪も無事に終わりました。

もうすぐ４月、大学はまた新しい学生さんを迎えます。図書館は万巻の書物を整備して皆さんを待っています。

お忙しい中、本号にご寄稿いただいいた先生方に厚く御礼申し上げます。　（K.Y.）